

折々の箱根路・足柄路

式 正 英

函嶺即ち箱根山は昔から人口に膾炙され、人の往来も頻繁である。通過するだけの場合も多からう。箱根を訪ねた折の印象的な側面を、長い期間の異なった季節からその寸景の紹介を試み、箱根の土地柄に触れてみたい。この小文を34年間の永きに亘り、お茶の水女子大学地理学科に勤務され主に地誌学を担当され、平成16年3月に退官された内藤博夫教授に献呈申し上げる。

一、夏の箱根路

姥子の湯 1998年の夏、旧盆の前に混み合うのを覚悟して箱根を訪ねた。大湧谷の駐車場に車を入れたのは午後2時頃だったろうか。予想通り車も人も一杯の大賑わいで、硫気孔や噴気孔を経巡る自然研究路に人の列が連なり、本来の危険を孕んだ雰囲気も遠去かってしまった様に思えた。足元にたぎる高温泉やそこで茹で上げる黒卵子の籠や更には腐卵臭の強い硫気に接して、凄惨な地熱地帯に足を踏み入れているのだと再認識する始末であった。人いきれや硫黄臭から逃れる様に西へと小径を辿る。ガラガラ降りの緩やかな斜面の、アセビやリョウブの広葉樹林に覆われた気分の好い道で、殆ど人に出会わない。先程までの喧騒はまるで嘘の様である。ハイキングコースとして整備され、丸太の横木が間隔を置いておかれている。折々地肌が見えるが驚く程に赤い土で、やはり火山活動時の熱による変質が原因かと思う。降り一方なので逆の登りは一寸しんどいかなと感じたが、帰りはロープウェイを利用する手もあると思い直して気楽になる。この緩斜面は7000年程前に起きた中央火口丘神山の最後の爆裂時に生じた土石流扇状地で、湖尻に達し芦ノ湖の水体を満えることになったと解釈されている。

この径は自然探勝路にもなっていて、野鳥や植物の説明板も見掛けられる。その時はウグイスの声しか聞けなかったが、ツツドリ、オオルリ、ミ

ソサザイ等の囀りが夏場にかけて聞けると言う。30分程歩いて出会ったせせらぎの辺に、梵字仏像の立札があり、苔生した巨岩の面に目を凝らすとそれらしい字が刻まれ、それに隣る河床の澱みを「弘法の硯り石」と呼ぶ。俄かに山中に人里臭さを感じたが、10分も行かぬ内に路が分かれ、右すれば車道、左すればややあって赤いタン屋根の大型の建物があった。建物は一部が平屋、概ね二階建てであるが、周辺部の軒や羽目板は半ば壊れて、管理が行き届いているとは思えない。建物は二棟に別れ、路は中庭を貫いている。ここは「姥子の湯 秀明館」と言う温泉旅館であった。旅館の好意でハイキング路が通してあると断り書きがあった。

中庭を通っても人の気配が感じられず、静まり返っている。入湯料2000円と受付の貼り紙ばかりが目立つので、試みに声を懸けてみた。ややあって返事があり、40才前後と思われる美女が奥の方から現れた。女主人か留守番かは判らなかつたが、「予約のお客さんしか泊りません。温泉には入れます」等こちらの質問には何とか答えてくれた。庭の一角から湯気が立ち昇り、風呂場からの排水としても温泉らしくて好い。ここの温泉は自然の湧出の俣に任せているので、湯量が多かったり少なかったりする。秋から冬には降雨が減るので温泉が枯れる事もあると言う。岩石の割れ目から湧いており、800年前坂田金時がこの湯で眼を癒した故事から、「金時の岩風呂」と呼ばれているが、秀明館を創めたのは100年程前からと言う。車道は近くにあるが、一寸引込んで在るばかりに、山中の一軒宿の佇まいで、まるで別天地である。一緒に行った家内は入湯料が200円に見えたと言うのだが、応対してくれた美女は果して本物の人だったろうか、尻尾の有無迄問題になって大笑いになった。それ程に山深い感じがした。お湯は透明な明礬泉であり、眼病に効能があり胆石にも効くとされている。

芦の湯 翌日はいつも行きそびれてしまう芦の湯を訪ねた。江戸時代からの「箱根七湯」の中の一つで最高の海拔860メートルに位置する。他の六湯が渓谷に沿って在るのに対して、局所的な分水嶺の平地にある。今も阿字ヶ池と呼ぶ小池が残っているが、泥炭層が厚さ20メートル程重なって出来た平地で、元は広い水面であった。近世前半頃には共同浴場を中心に旅館群が囲む温泉集落になっていたが、その俣現在まで続けて営業しているのは「きのくに屋」と「松坂屋本店」の二つであり、共に堂々とした規模の大旅館である。郵便局に立ち寄って周辺の案内図を貰い、古い共同湯を探してみたが、それらしい建物はあったものの、もはやその機能はなく半ば廃屋に見えた。

松坂屋本店西側裏手の東光庵跡は、宝蔵ヶ岳の麓の高台にあって不思議な雰囲気漂っている。もとは熊野権現社の境内であったが、明治4年の火災で焼失し、苔むした石碑ばかりが多数遺されている。東光庵は芦の湯に遊ぶ文人墨客の集った処で、和歌、漢詩、俳句等が石碑に刻まれている。大磯の鴨立庵が近世初めから俳句道場であったと同じ様に、文化・文政の頃に栄えたと伝えられる。この様な山中で何故かと思うが、芦の湯の位置は七湯路(箱根駅伝のコース、国道1号線)に沿っており、元箱根も2キロメートル程しか離れていない。昔の交通体系の中で東西いずれからもアプローチし易かった。芦の湯の泉質は七湯の他とは異なり、単純硫黄泉で薬湯としての効験が重んぜられ、これも人々を訪れ易くした所以であろう。

加茂真淵の長歌短歌碑、蜀山人の狂歌碑等文学碑だけでも9基あり、他に臥牛石台のある石塔や堂基礎壇等石造物が散らばっている。北側の一角は歴代庵主等の墓地になっているが、仏寺は見当らない。墓地に隣接した松坂屋の敷地に薬師堂が建つが、東光庵薬師堂とはこれであろうか、少々この辺りは不明確であり、全体が旅館の裏庭の様にも見える。

その墓地の中にドイツ将兵の墓石が混っているので少し驚かされた。「ドイツ海軍兵曹長 ツァーレル・ティオー之墓 昭和二十年十月十日 芦の湯部落宿舎松坂屋没」と刻んである。何か曰くがありそうなので、松坂屋本店で聞いてみる事にした。格別広い玄関の上り框に出て来たのは、薄茶色の和服を上品に着こなした、女主人と覚しい老婦人であった。先代の夫人で、当主松坂宣彦氏

の母堂にあたる方であった。芦の湯温泉の由来や新しい泉源等何うにつけても、明快的確に應對を頂くので、敢えてお歳を聞くと「89歳になります」との事で、大旅館を采配されている女将かくあるやの感を深くした。ドイツ兵の由来は以下の次第であった。戦中の日本はドイツと同盟関係にあり、互いの艦船が夫々の港に寄港する間柄にあった。昭和18年横浜に寄港したドイツ巡洋艦が事故によって爆沈し、数百名の将兵が帰国出来なくなり、ここ箱根芦の湯を宿舎に滞在する事になった。昭和20年終戦になりその俣俘虏となつて抑留されている間に、ティオー氏にとって悲劇が起きた。女将によると彼は横浜に遊びに行き、メチールアルコールを煽って、還らぬ人となつてしまったのだと言う。当時帰国できる当てもなく、帰国できても敗戦の祖国に何の期待も持てなくなった青年の心境には、同情の念を禁じ得ない。

文化8(1811)年出版の地誌書「箱根七湯の枝折」(東都 文窓、弄花編著、沢田秀三郎訳註)によれば、七湯の中で最も浴客が多く賑やかだった様で、総湯の周囲には旅館が6軒、軒を連ねていると書かれている。山代温泉等北陸に典型的な温泉集落と同様の形態が箱根に見られるのも面白い。上述の様に現在まで及んでいるものは2軒で、創業以来300年以上経つ由緒のある旅館である。東光庵以外にも江戸中期の「恩人碑」等珍しい文物や旧石器遺跡があり、常連客には獅子文六や中曾根康弘等が名を連ね、種々痕跡を残している。近くの駒ヶ岳東側山腹の湯ノ花温泉に次いで高い位置にあるが、芦の湯は主な交通路に近接している為、歴史的な集積があつて、重みのある場所となっている。

六道地藏 芦の湯から南西約1キロメートルにある精進池は、駒ヶ岳と二子山の両溶岩丘に挟まれて生じた裾合谷を占める、幅100メートル、長さ200メートルの小さな水面であるが、硫黄分の水質の為、生物の棲めない死の湖である。その周囲は鎌倉時代から「賽ノ河原」と見立てられ地藏信仰の霊地である。湯本から直接新时期外輪山の尾根に取り付き湯坂山、浅間山、鷹之巢山を経て芦の湯に達した後、精進池の東岸に沿い、芦ノ湖畔の箱根神社に至るのが東海道の湯坂路である。湯ノ花沢付近の噴気を地獄と見ての賽ノ河原の想定もあり得る。或いは精進池の周囲は今は樹林の翠が豊かにあるが、700年も前には荒涼とした荒野で

あったのであろうか。

ともかく今の国道を挟んで昔の路沿いと思われる位置に石佛や石塔が散在している。殆どが国の重要文化財に指定されていて、些か著名な存在である。「元箱根石仏・石塔群」として最近平成になってから整備され、歴史公園として小綺麗な佇まいを見せている。ここの石仏・石塔は殆ど永仁元（1293）年から応長元（1311）年の間に造立されている。磨崖佛の六道地蔵は像高3メートルを越える地蔵菩薩座像である。近くの安山岩の大岩塊の表面に彫刻された、俗称二十五菩薩も磨崖佛の地蔵立像である。他にも五輪塔等が散在し、入口には説明用のジオラマ館まで新設され、訪問者が理解を得易い様仕組まれている。これ等に見入っている間に一寸した出来事が起きた。午近くなって、それまで曇っていた空が明るく日差しを感じる程に気温が上がって来た。国道の下に掘られたトンネルを通り、六道地蔵尊の辺りで蒸し暑くなったので、上着を脱いで手に持った。そこから折り返して多田満仲の墓や二十五菩薩、曾我兄弟・虎御前の墓と伝えられる三基の五輪塔まで行って駐車場へと引き返した。空腹を感じて食堂を探したが、賽ノ河原と呼ばれている場所だけに、一切その様な施設は見当らない。結局芦ノ湖畔まで降りて、恩賜箱根公園の駐車場に車を置いた。杉木立の下のレストラン・ブライトを見つけて軽く昼食を取り、さて代金を支払う段になって財布のない事にやっと気が付いた。

支払いを家内に任せてその場を凌いだが、気持は収まる筈がない。恩賜公園の庭を垣間見てまた精進池に戻る事にした。そう言えばあの六道地蔵の辺りで上着を脱いだ瞬間を思い出し、まさかと思ったが落してでもいれば、見付かるかも知れぬと淡い期待を持ってそこへ行ったが、やはり無かった。その時は周囲に人影はなかった。致し方なくジオラマ館の所まで戻ると、タクシーの運転手らしい人が一人立っている。「この辺で最近落し物や盗難みたいな話はありますか」と声を掛けてみた。そんな話は観光地の名折れとでも思われたのか、強く否定されてしまった。

丁度その時ジオラマ館の中から出て来た中年の女性がいきなり「もしや式さんではありませんか」と言われる。手には落した筈の筆者の財布が握られているのではないか。中身も6万円程で間違いなかった。財布の中に名刺を一枚入れてあったのが

決め手になった。それにしても好い方に拾われて幸運だった。お礼でもと考えたのだが「私にもある事ですから」と爽やかに遠慮されるのだった。竹中さんと言うお名前だけは頂戴できた。「これぞお地蔵さんのお導きだ」と傍らにいた先刻の運転手氏が叫んだ。竹中さんは三人のご家族連れで「千葉ナンバー」の車に乗られ、会社の寮を利用して、パカンスを楽しんでいる途中であった。たまたま六道地蔵の前で落ちている財布に奥さんが気付かれて拾い、通る人ごとに聞いて下さっていたと承った。飛んだ御雑作をお掛けしてしまったものと愧じ入るばかりである。それにしてもあの婦人はスッキリさ加減が、樋口可南子ばりだった様に想い出している。

二、早春の箱根路、秋の足柄路

早雲地獄と道了尊 箱根強羅の温泉ホテルやリゾートは、中央火口丘の一角、早雲山の東側の山腹にあたり、早川の谷に臨むやや急な斜面上に載っている。其処から上を望むと丸く押し掛かる様な山峰が見えて、多分早雲山だろうと見当が付く。木の間隠れに目を凝らすと白い煙が山腹に立ち昇っている。それを目指して登って行くのだが、先ず小涌谷と仙石原をつなぐ車道を横切ってから、斜行エレベーターを利用すると、ケーブルカー終点とロープウェー始点が共通の早雲山駅前に苦もなく出られる。駅前の瀟洒な早雲山美術館の建物は其の侷だったが、中は裳抜けの殻の様で、もはや営業は続けられていない。美術館や観光地も、経営の視点から見れば、かなり厳しい状況なのであろう。美術館の対面の温泉旅館、頓狂楼早雲閣の構内を抜け須沢の上流側に出る。2004年3月半ば、山中早春の頃である。

ミズナラ等落葉広葉樹の枯れ枝をつけた幹ばかりが目立つ林内に、応急に舗装された車道が蛇行しながら上へ上へと登っている。温泉を運ぶパイプも数条這っていたり、所々にボーリング掘削施設も見られ、人影はないがその動きは充分感ぜられる。突然辺りの静寂を破って、生コンを運ぶタンクローリー車が現れ、轟音を立てながら通り過ぎた。砂防工事が上流の方で進行しているのであろう。夕暮れに近い時刻であった。行ける処まで行ってみようと、右手にあった一群の堂宇を通り過ぎたものの、忽ち行き詰まる。

細めの車道が尚奥へと通じているが、立札に赤字で「お願い」とあり、更に「関係者以外の立入りを禁ず。落石及びガス発生上許可なく進入を禁ず。所有者 箱根登山鉄道、道路管理者 勝俣組」とあった。これですべてが諒解できて回れ右にしたが、どうせならもっと入口付近に注意書きがあってもよいと思った。降り道で気づいたが頓狂楼の出口に「進入禁止」の小看板を漸く見付けることができた。

火山ガスの流下は馬鹿に出来ぬと急いで降りについた。堂宇は道了尊別院であった。山中にしては結構もやや大きく曹洞宗の修行道場かと察せられたが、案内書によると中に大きな温泉浴室があって、一般の人々へも開放されており、お布施少々(500円程)でお風呂に入れて貰えると言うことであった。

堂宇の脇には駐車スペースもあり、石造の観音像前の角柱に「早雲山崩壊事故遭難横死者諸精霊五十回忌供養塔 昭和二十九年 宮城野村」とあった。1954年から50年遡ると1905(明治38)年であり、その折に早雲山に崩落災害があった事を示している。道了尊別院の創建は1916(大正5)年とあるから、この場所への建設の趣旨には山や諸霊を鎮める願いもあったかと推測される。それにしても記録によると須沢の源流部の爆裂火口、早雲地獄では600ミリを越える多量の連続降雨を受けて1953(昭和28)年7月28日にも、火口壁の長さ200メートル、幅100メートル、深さ20メートルにわたる規模の大地すべりが起きて土石流を押し出し、死傷者28名を出す惨事を起している。須沢は強羅の南側に沿って流れているが、砂礫の表面は赤茶けて酸性水の流下を示し、強羅の地名はゴウロつまり大礫・巨礫のゴロゴロ堆積された様を意味する。そもそもの地形が須沢源流から、繰り返し齎された土石流や火砕流の堆積から成ると考えられる。即ち噴気孔や硫気孔、温泉作用などの後火山作用が源流部の火口址付近に今尚壯んで、周辺の岩石が変質され脆弱となり、常習的地すべり地を形成すると判断される。昭和初期以来砂防工事が継続しているが、いずれも土石流災害の減少を期待しての事業である。

早雲地獄は早雲山を挟んで大湧谷の爆裂火口と相對峙しているが、大湧谷の方は観光地に開け、早雲地獄の方は上述した様に閉鎖されている。谷毎に随分と様相を異にするが、両者の自然的性質

には共通点が多い。

足柄峠付近 ところで道了尊の本山は箱根外輪山の東側中腹にある大雄山最乗寺である。最乗寺は能登にあった曹洞宗の大本山(明治末年鶴見に移転)、総持寺の住職であった了庵、慧明禪師が任期を終え、故郷の相模に戻った後に、以前から知己の修験者道了尊の助力を得て開創した寺で、開山は応永元(1384)年である。地図で計ると別院から東北方向へ7.5キロメートル離れて本山がある。別院が800メートル、最乗寺が350メートルの高度にあり、同じ箱根山中でも林相は大分異なる。本山の境内には、創建当時の植樹による樹齢600年と言われる老杉の大径木が生い茂り、曹洞宗の修練道場としての静寂で厳粛な環境を保っている。人里から離れているが、大雄山線のある関本までは3キロメートル程しかない。関本は足柄峠に通じる街道、矢倉沢往還の旧宿場であり、中世或いはそれ以前には箱根越えの拠点となっていた。矢倉は鎌倉に多くの例がある様に、中世の武人の墓所で、山腹に浅く穿たれた洞穴である。矢倉沢と言う音には中世の響きがある。

30年も前になるが、昭和51(1976)年10月30日、秋酣の頃、関本から矢倉沢を経て足柄峠を越え御殿場への降路を辿ったことがある。大学の研究室にあったジープを自ら運転しての旅路であった。当時道路は未舗装の砂利道で林道の様な具合だったが、四輪駆動のジープでなら何とか乗り切ることが出来た。今はこの足柄路を箱根越えに利用する人は殆どいない。時折ハイカーが通る位で寂れてしまっている。山地を越える部分の距離は短く、東麓からの高度差も700メートル位で大したことはない。古代には箱根越えの主要路であったのだが、富士山の噴火で噴出物に埋もれ、利用を阻まれる様な事が重なり、南の箱根峠を越え元箱根を過ぎてからの湯坂路や七湯路および須雲川沿いの路等が開けた。足柄峠を越える路の方が、古代から鎌倉期末まで公道であった。

関本から入ると流域の山は第三紀足柄層群の礫岩や頁岩の山地で、言わば丹沢山地の南への延長部分である。左岸側の目立ったピークの矢倉岳(870メートル)は石英閃緑岩の岩栓と認められている。谷奥の集落地蔵堂付近から先は、やや急な斜面となり路の屈曲が著しくなるが、そこから箱根外輪山で、溶岩や火山岩屑が基盤の第三紀層を覆っている。この部分の高度差300メートル

程を登れば、足柄峠に達する。峠の海拔高度は759メートルで稜線は幅広く、ススキの草原やミミ等の樹林があるが、聊か荒涼としている。「足柄関所跡」を示す木柱や「足柄関所由来」の説明板が目立つ。

それによると昌泰2（899）年、板東に群盗が蜂起した為関所が設けられ、元亨元（1321）年、富士山噴火により足柄路が埋まり箱根路が開かれる迄の422年間、関所として機能したとある。歴史年表等によると796年に東海道が開かれ、延暦20（800）年から翌年にかけて富士山の噴火があり、足柄路が埋まり802年には箱根路が開かれたと伝える。理科年表によれば貞観6（864）年～貞観8（866）年の富士山噴火で、青木ヶ原溶岩流が流下し西湖を二分したとある。また承平7（937）年にも富士山が噴火した記録がある。当時は富士山噴火の度に、足柄峠付近はその東側にあたり多量の火山灰や噴出物によって覆われ、道路が埋没する被害を蒙った。1年程で修復開通した様であるが、足柄路から箱根路に移った時期は、上述の様に一致せず明確さを欠くものの、南側の箱根峠を越える道の利用が次第に頻繁になって、主要道としての地位を譲る結果になった。

訪ねた当時、足柄峠には小さな茶屋と「足柄山聖天堂」の社殿が僅かに建っていた。聖天尊の社がある理由は矢張り往時の交通に関係が深いと言えよう。東京浅草の観音様から北に少し離れて待乳山聖天堂があり、江戸時代には名所であったし今も訪れる人は多い。聖天尊はインドの神に由来し、歓喜天等性の賛美をベースにした信仰と関わりが深い。近世以後に表街道の箱根神社の箱根権現に対して、裏街道に聖天堂を配置した様にも思える。

社殿の傍らに立看板があって「^{しも}下」の安穩由来」とある。何事かと思つて読むと大意次の様な次第であった。“昔小田原在の老女が足柄山聖天尊に、病気になって家人に「下」の面倒を受けるのは我慢できないことだから、そうならない様に功德を垂れ給えと祈願し、持参した「腰の物」を差し出した。堂主は是に応え誦経し「腰の物」に印綬し与えた。くだんの老女はその靈験により米寿を過ぎて大往生された。”看板の終りに「おとこもの 五〇〇円、おんなもの 一〇〇〇円」とあったので、印綬のある「おとこもの」を買い求めた。誰しもこの点は同じ思いであろうが、聖天

尊の功德が頂けるかどうかは信仰の深さによるのだろう。御殿場への降りは350メートル程の高度差しかなく、余り時間は掛からない。林中の所々道沿いに中世の歴史を思わせる石塔や石碑が残されていた。

しき まさひで

お茶の水女子大学名誉教授